



12
門へ
2027
巻 2

釈迦の地下

其後釈尊の西母摩耶夫人の胎に宿りて三子大干世尊うらやむじ此
のそとまで照して西母もまた母摩耶夫人
たうの天よじま統まひと西母にて
みうらと別具して切利天へのかり結りんと
結んて外道たうとて釈尊と天へのかり
トそと道とゆさうんとそと外道たうとて

けうお道てのひびきうまおげごうかう其
中おまんづうお道とらうおまんおまん
おのかりて三めづりおまんひて二万
三まんのどくどくおまんおまん四万ゆおん
のちことおてくおんおん一切お生と
なまおめおその時四天王おまおまおま
てこれお中お大自在天神とらうおい個鹿野
苑おまお海とらうおの西まへおありけおと
さおおくとおさうさうさう二百お人のら
うらお中おまんづうお一お目連者おけおと
おりおたうお天へのかりておまおぬ人とら

てまうんとおらうおお道れおとらうと
道とらうらうらうらうらうらうらうらう
おんうのらうらうらうおんへらうらうの
とらうらうらうらうおんとおとらうらう
お四万おらうらうらうおとらうらうらう
おまんのとらうらうらうらうらうらう
お道とらうらうらうおのまおお道とらう
ておとらうらうらうらうらうらうらう
おらうらうらうらうらうらうらうらう
物利天へのかりおまんをんとらうらう
おまうらうらうらうらうらうらうらう

りんぎをとりつゝしるせ給ふ座うじうゝあんぶ
ごうむらうちやうれ浄飯大まれ室よとじまき
なりて七日としる母よとくれさてまうりてお
むけうらんみよ座うじを給ふのり伝たとも
とめ雅行若約十二年と給て佛とたすれ三
ちやうくつととめてたうのま天に母のじまれ給ふ
事と給てまこまてまうりてゆとる給へとこれ
りしと座部主人さうりしとまやくれ給へ
ましとくれだたいまやくれ給へしと給へを六百
人の天人の供してやうくしとこれらうつと給ふ
さてうらひ母對面ありたわらまうりてまうり子ま

釈尊をさうりたんしる給ひまてまや座人の給
ひうらひその四中は我まれ釈迦佛といふるまや
うとありまうりつとまうりてと給へと給へと
う給へと給へと佛といふての給へと給へと
とありんと給へと給へと給へと給へと給へと
が中人じうんと給へと給へと給へと給へと給へと
みとありしと給へと給へと給へと給へと給へと
おがしめせ二十四人なび給ひつと給へと給へと
の中へじうしと給へと給へと給へと給へと給へと
あまをれと給へと給へと給へと給へと給へと
入らうとありと給へと給へと給へと給へと給へと

と成親をともむめとらめら給ふすやぬ人件と
とてすまうりむうの恩妻の情に思ひつて給ひ
りつあそれこれなむとてさあわんどむりくれ天人と
ら是とんてすまうり候となぐり給ひらる時よ何
らさ給ともらんこれその母うらま地衣部りの
本れ美かろこと信とやゆのみやうれ喜樂と
重の上よさうにぬの給ともさ今件とあり
ひゆともさせうかりとて母れまうまふ事
どうも給りつと道心とわう雅約苦約と
母とんすんと思ひつてかたり是部とへり母
の恩徳なりつと給へども又摩耶夫人のたすく

たまとうともえうめと何にたつんかかろゆ
舟七月とていれとせうれとて無考れぬにさそ
まてとてえのうらとわらま出つとあさうら
りそやわがうらもや給へそれともぬと
とてまうら母うらと天よよはまてゆとたぐひ
何物ごうり候とくく給ひてあて摩耶
夫人の給とも親を親とあにほと親給へ
さや給ひのまてさうの給りたまひと大光の
とてあら三子大平世果と照し給ひて母は
ぬめにはと親給ふ三ついやとて事なり
生うくりのこれぬ理よりつと苦果と出ん生

死無考なり又とまりがごとく由きやうさじ
さうちんあはれはと悔と母ありとさうぢ
母ありくのあかやうさうらなりと祝たまふ
く佛の西らしようつてさうくは摩耶夫人
さうりとめてさうく相又なまむたう女は
たう十たれ御年らどめて座もたうあま
枕とあへ給ひ十九歳あてまふとかたご
せんよて西かあかうくそのくらのなまむ
あまちこれ西の西あてさうらさあまむ
給ひぬ敷の女座うらと志さうくは悔とま
うとらどらうの西ひはあへぬ悔とまひあ

なご母らうとさあはれ西ひよとまふ
んさうひしなれなまのあまぬと
あひさうあへ給ひなりさうさあれ
給ひさ給やうらとまびさうし
さうねるあひさうとさうひさう
ひ給ひてたうさうとさうひめひはな
りこれ事しなまへ給ひかひさあ
女うさうひさうらうのあちう三十八天
て母れさなひな座う事二百七年四日
たうひ一月二月をさうらとさうひ
あひさ母のさうらとさうらとさうら

てんくさうくわんごんよいらんまのうらうらん
— ちんをれらちびのうらにせんまんのいひよか
— 心まいのうんごんまのうんごんれまのうんご
— 命のまんの月ののうんごんとおつごん— わんごん
湯柳れゆよなうらうらうらうら— わんごん
まうらう— 命のうんごんごんごんごんごん
ついでにんごんごんごんごんごんごんごん
おんごんごんごんごんごんごんごんごん
まのうんごんごんごんごんごんごんごん
ありてんごんごんごんごんごんごんごん
かゝるにんごんごんごんごんごんごんごん

かゝるにんごんごんごんごんごんごんごん
おんごんごんごんごんごんごんごんごん
まのうんごんごんごんごんごんごんごん
ありてんごんごんごんごんごんごんごん
かゝるにんごんごんごんごんごんごんごん
おんごんごんごんごんごんごんごんごん
まのうんごんごんごんごんごんごんごん
ありてんごんごんごんごんごんごんごん
かゝるにんごんごんごんごんごんごんごん

たはたみしつとてまうとてなびとてかきな
ちめたる女れは思ひれあまなりはうんこまふせ
りよものよこのひのふんごれあまはよく三蔵の
らうらうのよのちをまうてお百人のぬんこらの
中へ玉の着^{つく}さらやうれうらうりもわい出
給ひさわれの中へは^{あま}あまのびまうま
なり親^{おや}子の契^{ちぎ}あうむわと思ん人またく
まうとてさちやうの内よりわい出給ひ
屋志^やあたる女れの中へうらたえ屋づさ屋うま
なり浄飯王^{じやうげん}とてうめまうそまやこれんこめ
とあまやうみそまうらあいらうらあ百人の

中へとうとわはく^{あま}あまの給ひく^{あま}あま
あけらんこまうとまの給ひてい^{あま}あまらに
あくやうと母の給ひそ^{あま}あまの給ひそ^{あま}あま
と時^{あま}あまと三十二さう八十あまうまんとくあま
まんのさうさうとてま^{あま}あまのあまあまあま
ま^{あま}あまのうらあ^{あま}あまのあまあまのうら
び^{あま}あまのあま^{あま}あまのあまあまのあま
ま^{あま}あまのあま^{あま}あまのあまあまのあま
浄飯王^{じやうげん}とてうめまうて^{あま}あまの内^{あま}あまの
と心^{あま}あまのあま^{あま}あまのあまあまのあま
あ^{あま}あまのあま^{あま}あまのあまあまのあま

くねくねしてねくくせ給よひうう國は世じんごう
志也のりもそそそとて佛よのまれりといま
く給ひてそやそとれうと給よのといれ阿難
そ者志やうあの大目連大志やう文殊^{もんじゆ}たそそ
あやーの佛よー給うくといぬいれあつこうは
そそそ給んごうよおうと給よぎや佛より外り
何ゆううろーと思ひ給よづこ母うくいれん
給よんとなつひーたそそとね言ての給ん
じーは國よもうありたまなくーせ天よりひ
給神よ給うそ時名懐妊^{くわいじん}ーせ一人の男よとう
と給つり十三歳^{じゆうさい}乃とそ父大目持りた病^{やまひ}とうあ

給ひてまうらまは給よなそそとあつ醫師^{いしや}の
ーやうまそそそとてぬとそそとたそぬ人のま
そぬのそとぬーまうとーとーとらうかどに
世回とらうぬたさうにううそそとらうのほし
とーか母くたんれたまそそとらうーめして
わまーそじまうていこそとらうたそとらう事
たうーと母れ病母^{やまはは}ー給よとーやらうつととらう
トや給らうのうごうりあつ事なまそと誰^{たれ}をま
人う世^よ給ーとそまぬとそそとらうとづらとて
おとあさんよととそとたび給ん父大目れま
あつんとと給んたううに母れ病母^{やまはは}ーけつら

け時を子おほくしりけり春養れあふり
身命とわびなうひりけり心あふり
れさかとなりあんと思ひくわづらうとわ
及のたま母下とわづらうとわづらうとわ
わづらうとわづらうとわづらうとわ
— じせびのもの乃けりびあつちたけい—
— 時天よあつちたけい— 時天よあつちたけい—
— 若父とわづらうとわづらうとわづらうとわ
— とき— 命とわづらうとわづらうとわ
— とき— 命とわづらうとわづらうとわ

母— 時天よあつちたけい— 時天よあつちたけい—
母柳たけりけりけりけりけりけり
せんとき— 時天よあつちたけい— 時天よあつちたけい—
けりけりけりけりけりけりけりけり
とき— 命とわづらうとわづらうとわ
— 母— 時天よあつちたけい— 時天よあつちたけい—
けりけりけりけりけりけりけりけり
— 母— 時天よあつちたけい— 時天よあつちたけい—
けりけりけりけりけりけりけりけり
— 母— 時天よあつちたけい— 時天よあつちたけい—
けりけりけりけりけりけりけりけり
— 母— 時天よあつちたけい— 時天よあつちたけい—
けりけりけりけりけりけりけりけり

乃そのたまきしあめれあーあまことならびてんごい
あやこれきの殺らうんまたまおの二月十五日の
月の不雪うそくうくとみ十二日の夜み
母の地乃多とうらまうり又あつるをかりしぞ
まうこまの月由えうりひのいらうぞ地も花
とくうてまらうけいとのくうありあつりわく
さうあつれきのこじんあやまら事しそたうさ
さういせ三十二のあゆみのそとくこれあゆ皆
まんかといふまゆくうま人の根よまづこまひ
いぢやうれ草本まぞみれおらよとぞこ也
接提何のまとうらまのそと七日うらとまら

てたうとせとまのままそと花うた本らそをむ
とびり善提樹の葉もろくハハ提提とまの
くまれくまさんたんまもて候ようまさんやの
あひさりのあうーあづうあまもこれたうそと
ながうあーさうあやま日うらま地よらまこく
あやうたれやいぬくまんうらうらまらひくれ
あひさく又うれせうの佛のさうううとをこれた
まうんさまのさううの万室れたうまはまたうま
まのせいいたひれぬらうまの室らあまゆうまま
こまうんうらうもあつらうのうんらくまんの風
みらう花とらう年ごうのまよあわけんらうの

雪のふるり月と又うん秋の夜をまらそがし
物集つ夜移らんよ入給ふととぬらたさひじつや
うさうとぬらそとあうん事かうさや
里の目連ハれうりきたはあつどし給ひてねん
のさしそとみこくまうり給ひび世集ハ船は
山は船り給ひいりさそとくはねとせんん
の藪つこくそとめとあくたとはあまの
さうはけつさあまらりけつどあまよらんうらたを
けのそとまらた又さしぬらひのさうひとそとま
てどとさうよりのかくて七日舟とさう遊樂さ
者山とお集り給ふとまら給ふやかやうの佛

乃西涅槃なり給ふとんぬて山とお給ふ通よて
とや西給らんしとひ給ふ人候をたぐしとそとま
とやと善けきとと世集とあ百人の西身子とと
と行しまびあひてそとまのび給ひらうさひがた
とそとさうしとそと給ひてたうしとそとまや
う舟入給ひひの道はと由ハ世集れあり給ふと
みとさうあくとさうのあそあそれたう世集ハとと
念の中と行しとそとここの西糖はらうつとそと
涅槃乃まらよひさぬづとさかひさ給ふとそとと
うこさうあうぜん舟とさうひ下ハあひれそととま
ぬまらとそと給ひてしとさうとぬて夜釈そと

西よりうらやむがごとくもんは推のやとむく我
終つてさとの終つては阿難の終ひらういふ
してたやまの推のやとむくくむさうあふ
くひと終つては業ありさうあやむは佛
のつらさうとあつてわくさうはもごこと今て
あがもさうと終つては天にありはよあてあひ
さうさ終つてはさうのさう佛を業とありは
れりやうとあつてはさうのやとひくさ終
むさうはさううらなはさうのあはさうはま
しくして金指のうらにさうのあやとあ
ふれ終つてはさうのうらとひくさ業と

西よりうらやむがごとくもんは推のやとむく我
終つては業ありさうのあはさうはま
しくして金指のうらにさうのあやとあ
ふれ終つてはさうのうらとひくさ業と
たのうらとあつてはさうのあはさうはま
しくして金指のうらにさうのあやとあ
ふれ終つてはさうのうらとひくさ業と
はさうのあはさうはましくして金指のうらに
さうのあやとあつてはさうのあはさうはま
しくして金指のうらにさうのあやとあ
ふれ終つてはさうのうらとひくさ業と
はさうのあはさうはましくして金指のうらに
さうのあやとあつてはさうのあはさうはま
しくして金指のうらにさうのあやとあ
ふれ終つてはさうのうらとひくさ業と
はさうのあはさうはましくして金指のうらに
さうのあやとあつてはさうのあはさうはま
しくして金指のうらにさうのあやとあ
ふれ終つてはさうのうらとひくさ業と

乃に八坂二十八年よりしてちやうりんとてりて
終ふものさうらんより終ひてさうり終てぶご
いよまゝしゆとてしたるれをそとて納てひま
とりのくひううんとてしつとたうれうら
入終ふとの終ひて阿難志づくく釈とてんじ
なり終ふて則ぐんてうごのわれよりそとま
川て入七つうれ西度よりりりつよ度し終ふを
みくららんさられ云は終度よのりり終ひぬた
一終ひ志終らんよ六件八書終れうら母
四此のしととあつとるんそと終ひしと也そのと
くならんしととのくの終ひたれを阿難のいそ

おちよなりびとて一代を聖教と終終ふそのそと
らうん進進なりたりたうく阿難と佛のどくわが
まよりて三此のゆえんとたう終ふしよ六阿難佛
よ終終ふしとてうごひ二よ六釈を阿難とぐん
終ふしとてうごひ三母いたうの釈をのわりし
て終ひし終ふしやうごひくちとてたまふ
又らんうられゆえそ阿難とて今て為
うそ終人釈とてのくうごひて末代のね生を
うらよ釈益とてしと終ひしとて子人のうかく
むがくれ終はとてあつとてし書終ひしとて
がとちやう山の石の硬い雲よ六つとやうと山乃石を

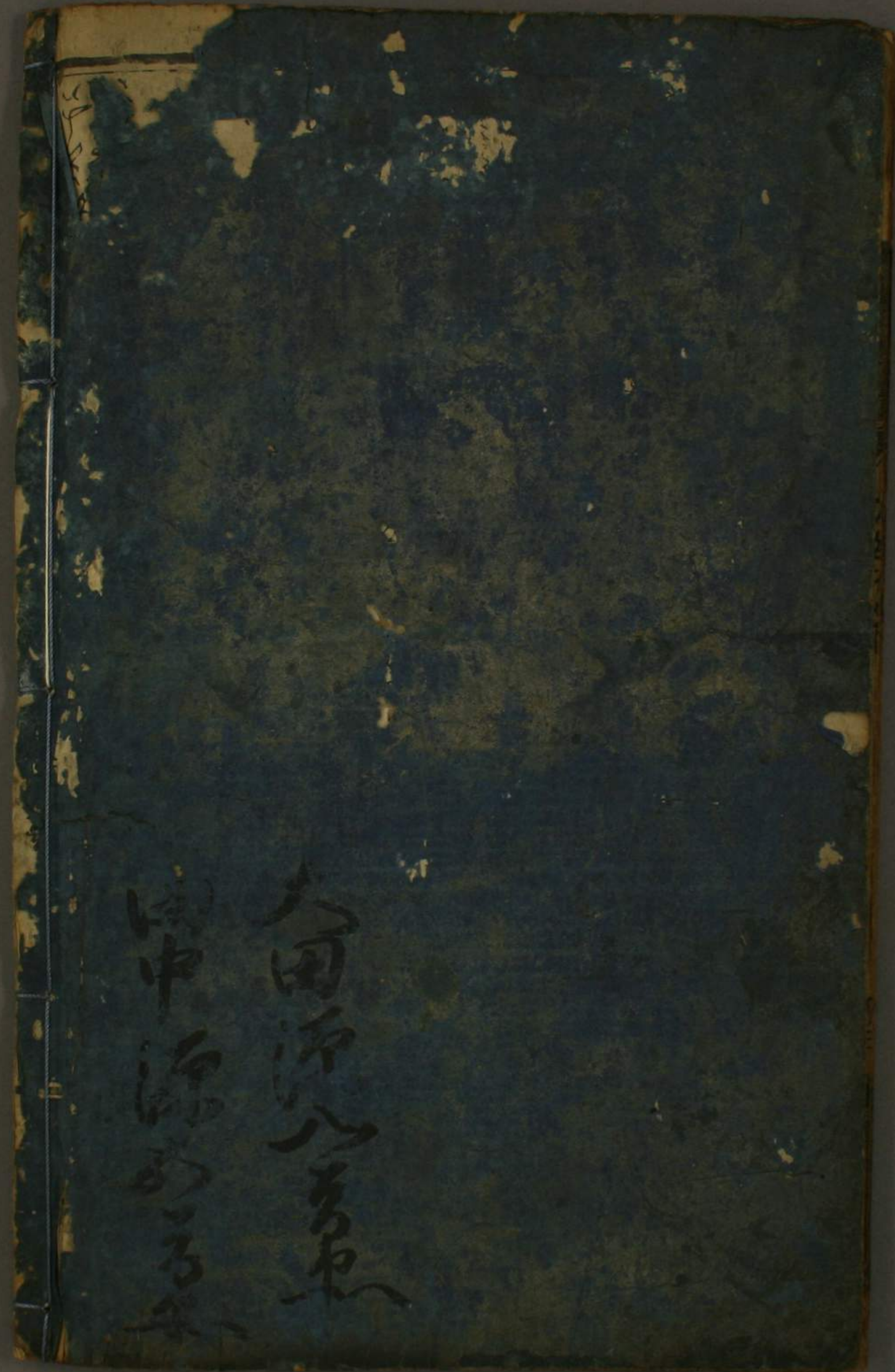
莫念れん人々を頼めよや也なうくればのとの
そこ母とあんならうまふ所のきやうはねん縁んじ
て海り事なりせんんんのきやうれ中まことん
ふまきやうまんのさう百少くあるまんのまんじ
まかく海くうしてまうまうまうに涅槃ねはん云
釈迦如来久き旅を皆在る生一念心中

釈迦が地下終

寛永六年癸卯九月吉日

掃屋 源長清 開板





大田源八
中源